
history-GUY

羽山ヒカル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

h i s t o r y - G U Y

【Nコード】

N 0 6 4 5 E

【作者名】

羽山ヒカル

【あらすじ】

ある日、クールな高校生ノボルはランニングをサボリ公園のベンチで不思議な青年に出会う。この青年との出会いが物語の始まりになるのであった

第1話 出会い

うるさい目覚まし時計が部屋全体に響き渡った。
うるさい。静かにしろっ…

目覚まし時計を必要以上に叩いた。

青年がムクリと体を起こした。細いまゆ毛に整った顔立ち。世間ではイケメンと言われるだろう

朝は眠気という強力な悪魔が宿る。

高校2年生の網野ノボルは鉛のように重い瞼をこすりながら登校していく。

部活は入ってない。クールな性格が人と交わることを拒む。
長い授業が終わり部活の時間になった。ヒラメのような顔をした担任の先生が近づいてきた。

「ノボル、お前最近たるんでるな。男ならシャキツとしろ！ 裏山までランニングいってこい」

「…（そのまま帰る。）」

しぶしぶと走り始め学校が見えなくなったあたりから歩きだした。
まだ桜がわずかに咲き誇っている。

誰もいない公園のベンチに座った

澄み渡る空に真っ白な雲。

目をつむると体全体が心地よい。

「…（このまま寝るか）」

半分意識が飛び始めたとき、背後に人の気配がした。

「これが…日本？」

とっさに飛び起きた。

「誰だ？」

見るとスラリと高い身長の若い男がたっている。25歳くらいだろうか

服装は

浅黄色に白いダンダラ模様の羽織。

「…？（…どこかでみた気がする。）」

「どうも。私は沖田総司です。」

「俺に何の用だ？」

…

「あれ？…あなたは驚かないんですか？私は新選組一番隊組長の沖田総司です。」

「だから俺に何の用だ？」

「…まいったなあ。信じてもらえてないのかな」

ノボルはベンチに座ったまま下を向いている。自然に視線が青年に向いた。

青年の足元はゆらゆらと揺れていて透き通っている。

「あんた…幽霊か？」

「みたいなものです。あなたにお話があります。」

ノボルはまた下を向いた。

第2話 霊界からの任務（前書き）

お楽しみください

第2話 霊界からの任務

「あなた名前はなんというんです？」

ニコニコしながら沖田は話かけてきた。

「……ノボル。」

そうつぶやくと

ようやく顔をあげ、ぼんやりと沖田のほうを見つめた。

「ノボルさん。日本が好きですか？」

「…べつに」

「私がこの時代に来た理由をお話します。この時代の日本の歴史。それを根底から変えようとする悪霊が現れました。私はそれをこの時代の人間に伝え、その悪霊の正体をつきとめ、一緒にその悪霊を封印する任務を負って霊界からやってきました。私は死んだ人間です。今、この時代で生きている人の力が必要なのです。ノボルさん、力を貸していただけませんか？」

突然の話にノボルは黙って耳を傾けていた。

「…（なんで俺が？）」

「信じられないかもしれませんが本当なのです。このまま放っておくと 現世にまで影響がでます。私を信じて力を貸していただけませんか？」

ノボルは口を開こうとしない。
辺りは薄暗くなってきていた。

「とりあえずウチについてこいよ。あんたの姿…見えるのは俺だけか？」

「ノボルさんだけです。この時代では私が選んだ人間、あなたにしか姿は見えません。…それじゃ、おじやましようかな。この時代の日本人はどんな暮らしをしてるか楽しみだな」

つい先ほどまでの深刻な顔とは一変、沖田の顔は再びニコニコ陽気な顔になっていた。

「沖田さん」

「ん？なんですか？」

「…廃刀令違反だ」

ノボルは静かに立ち上がり歩き出した。

「ん」。まいったなあ。」

沖田は嬉しそうにノボルのあとをついていった。

家についたのは夜8時過ぎ。帰ってきて早々にノボルは黙々と夕飯を食べる。

「あはは。ノボルさんおなかすいてたんですね。それにしてもこれが家？現代人はなんて贅沢なんだろう。ん〜ご飯は昔とほとんど変わりのないなあ。これは何ですか？」

「…ハンバーグ」

「ふうん。変わった食べ物だね。」

母親が不思議な顔でこちらを見ていた。

「あんた大丈夫かい？1人言なんかいつちゃって」

ノボルは食べ終わるとさっそうと二階へ上がっていった。

「ノボルさん。時間がありません。準備をしましょう。時空を超えて過去へいきます。この光の扉…」

ノボルはベッドに寝っ転がっていた。

小さいびきが聞こえてくる。

沖田は微笑んだ

「よろしく願いますよ。未来の新選組隊士さん。」

第2話 霊界からの任務（後書き）

ご愛読ありがとうございます。次作もよろしくお願いします

第3話 過去へ（前書き）

お楽しみください

第3話 過去へ

ノボルは翌朝起きなかった。

母親が学校に遅刻すると急かしにきても布団から出ようとはしなかった。

母親は仕方なく欠席届けを出しに電話を手にした

「あれ？ ノボルさん、学校というところ行かないんですか？
学問を勉強するんでしょ？」

沖田が話かけてもノボルは返事をしない。

「ノボルさん。新選組をご存知ですか？ 私たちは 時代と戦いました。今までこの日本は、さまざまな考えを持った日本人同士が命をかけて戦い、時代が築かれてきました。その時代を根底からひっくり返そうとする悪霊を私は放つてはおけません。私たちでその正体をつきとめましょう。ノボルさん、いきますよ。起きてください。」

沖田は必死にノボルに声をかける。

外は夜があけ、小鳥たちが嬉しそうにさえずりあっている。

ノボルがようやく上半身を起こした。

「…（どうやってその悪霊を探しにいくんだ？ 探しだしてどうする？ 生身の人間の俺に何ができる？ 相手は霊だろ？）」

「私が力を貸します。あなたは私と一体になって戦えばいい。相手は目的の悪霊だけとは限らない。でも心配いりませんよ。私がついてますから。」

沖田は笑みを浮かべている。

話を聞いていると事態は深刻なのにこの青年はいつも楽しそうだ。

「…（どこにいく？ どうやって旅立つんだ？）」

「この大きな張り紙が入り口です… ところでこの人、誰です？」

「…（浜崎あゆみ。歌手だ。）」

「ふうん。歌手… ってなんですか？」

「…（歌を歌う人間のことだ）」

「へえ。是非一度聞いてみたいな。」

ノボルは寝間着を脱ぎ捨て、学生服に着替えた。

そして沖田をじっとみつめた。

「あんた。心の中の声が聞こえるのか？」

「ええ。私はあなたと同化する身ですからね」

沖田はニコツと笑いながら浜崎あゆみのポスターに手を触れた。

するとポスターの中に空間のゆがみができた。

同時に眩い光が放たれた。

「いきますよ。ここが入り口です。」

ノボルは黙ってポスターを見つめていた。

「沖田さん。」

「なんです？」

「浜崎あゆみに惚れただろ？」

ノボルは迷いなくその空間に飛び込んだ。

「まいったな。あなたにはかなわないや」

沖田も空間の中に飛び込んだ。

主人のいなくなったその部屋では、浜崎あゆみが1人大きな張り紙の中で笑っていた

第3話 過去へ（後書き）

第三部もご愛読いただきありがとうございます。次作も是非よろしくお願いします。

第4話 宿る力（前書き）

みなさんはタイムスリップを信じますか？ 以前、中国で万人の兵士がいつせいに消えた不思議な現象があったのをご存知ですか？ 神隠しと言われています。

もしこの先、未来にタイムマシンができれば、みなさんはなにをしますか？

過去は変えたくても変えられない

しかし未来は自分で造るものです。

過去の失敗や悔いを経験として受け止め、未来に役立てたいものです

第4話 宿る力

ポスターに向かって飛び込んだ瞬間、初めて時空間に身を委ねた。

ノボルは目をパッチリあけて辺りをにらみつけていた。

なんとも言えない全てが歪んだ空間。

体はある一定の方向へ吸い寄せられる。

沖田がノボルの手を握りしめていた。

「怖いですか？」

「…べつに」

突如、まばゆい金色の光が空間全体に飛び散った。

「ノボルさん。大丈夫ですか？」

ノボルは横たわっていた。

目を開くと真っ青な空が曇1つ受け入れずに広がっていた。
山の中だった。

「歩きましょう。まずは街を探します。この時代の人々に特に変わった異変がないか話を聞きにいきましょう」

ノボルは空を見上げたまま動かない。

ガサガサっ…

人が集まってくるような気配がした。

茂みの中から6人の男が現れた。

見るからに、われらは盗賊だと言わんばかりの人相だ。

全員刀を持っている。

中には槍を手をしている者もいた。

「…」

「おぬしら、変わった格好をしているな。この場を生きて抜けるにはどうしたらいいと思うか？」

6人の男たちはノボルと沖田を囲んでいる。

「…この者たちには沖田の姿が見えるのか？」

よく見ると沖田の揺らいで見えなかった足元がハッキリと見える。両足を地にしっかりとつけている。

「沖田さん…」

「過去の時代でのみ、私は生身の人間になれます。驚きました？」

沖田はニコツと笑ってノボルを見つめた

「私の力…教えましょう。」

沖田の体が透き通り始めた。

そしてノボルの体に吸い寄せられるように重なっていく。

そこにはスラリと背の高い、浅黄色に白いダンダラ模様の入った羽織りを着た青年が立っていた。

目の前でその現象を見ていた6人の男たちは、キョトンとしている。

しかし我に返ったように親分らしきゴツい顔立ちの男が刀を抜いた。

同時に他の男たちも刀をいつせいに抜いた。

「か…金を全部だせ！その腰の刀もよこしてもらおう。」

「お前の言うことを聞く理由はない」

沖田は涼しい顔をしている。

親分らしき男が狂ったように刀を振り上げた。

しかし目の前に狙った青年はいない。

周りの5人は自分の背後をみている。

男は操り人形の糸が切れたあのように倒れた

刀の柄に手をかけた沖田が涼しく笑っている。

「金と刀を取りにこないのか？」

第4話 宿る力（後書き）

第4話をご愛読いただきありがとうございました。
大した文章力はありませんが次作もお楽しみいただけたら幸いです

第5話 後鳥羽上皇（前書き）

後鳥羽上皇は 鳥羽に住むガテン系の海女を好んだため後鳥羽上皇と名付けられたそうです。また女好きであると同時に男好きでもあったらしい。才気活発で容姿端麗で歌がうまかったそうです。

高校時代は歴史は新撰組の時代以外は嫌いでしたが今は興味あります。

第5話もお楽しみください

第5話 後鳥羽上皇

5人の盗賊たちは啞然としていた。

「この時代の一番偉い人ってどこにいるの？誰か案内してよ」

ニコニコしながら沖田が話かける

1人が口を開いた

「この時代？ あんた変なこというな。まさか後鳥羽上皇に会おう
つてのか？」

暗殺するのかい？ へへへへ おもしろそうだな」

後鳥羽上皇…となるとここは鎌倉時代か

沖田がノボルの体と分かれた

「わかりました？私の力。ピンチのときは私がノボルさんと同化し
ます。一緒に頑張りましょう」

ノボルは不思議な感覚でいた

同化というものの体は沖田になる

意識がなくなるのかと思えば同化中もハッキリしている

「あ、その後鳥羽さん、別に暗殺するわけじゃないからね。とにかく

く案内してください。」

盗賊の中の1人に案内されて大きな屋敷の前に着いた

門番らしき男が1人立っていた

顔は痩せており、身長が高い

ヒゲが濃い

「なに用か？」

男が話かけてきた。

沖田が答えようとしたとき

案内人としてつれてきた五平という盗賊が口を開いた

「暗殺しにきやした」

…！？

なにをいうかこの男！

「後鳥羽さんにお会いしたく参りました。お話は直に会って話させていただきます」

「拙者、宗則と申す。後鳥羽上皇様の護衛を務めておる。最近、得

体の知れない何者かが屋敷周辺をつろついておる。…まさかおぬしら？」

じろりとこちらを見ている

「我々もその者を追っています。どうか上皇様にお取り次ぎを」

沖田は頭をさげた

しばらくして宗則が口を開いた

「ついて参れ」

沖田はニコリと笑いノボルを見た

「なんだ？」

「ずっと黙ってますね。怖いですか？」

「…べつに」

門には菊の紋章がある。

沖田は背後に気配を感じた

が、知らないフリをして前に進んだ

中に入ると広い間に通された

やはりここにも菊の紋章が目立つ

すると容姿端麗の男が現れた

「かの者たちよ。我が後鳥羽上皇じゃ。我に何用か？」

「暗殺しにきやした」

…！?!？

「いえ失礼いたしました。私、沖田と申します。おそれながらお尋ねいたします。近頃変わったことはありませんか」

宗則と後鳥羽上皇は顔を見合わせた

「先日、屋敷周辺に虎の紋章がついた短刀が落ちていた」

虎…心当たりはない

目的の悪霊と関係があるのだろうか

第5話 後鳥羽上皇（後書き）

ご愛読ありがとうございました。
次作もよろしく願います

第6話 菊一文字則宗（前書き）

この物語を書き始めてから日本の歴史を再び学ぶようになったなあ

高校時代は歴史の授業が嫌で仕方なかったが…

人間 時が経てば変わってくるんだね

さて

本編へどうぞ

第6話 菊一文字則宗

虎の紋章が入った短刀…手がかりはこれだけだ。

天井裏から物音がした。沖田は瞬時に抜刀し、天井を突いた天井から肩を突かれた黒忍び装束をきた男が塊のように落ちてきた

「誰に頼まれてここにきた？」

沖田の表情が鬼のようになっている

「話さなければ命はないぞ」

黒忍び装束の男は

「九郎…処理」

それだけ言い残すと隠し持っていた毒薬を飲んで自害した

後鳥羽上皇と宗則はその様子を啞然としてみていた

「見事なり！沖田殿！おぬしの剣術は誰に習ったのじゃ？」

宗則が感嘆の声をあげた

「天然理心流です。私は道場の塾頭をしていました。」

ノボルは今度ばかりは寒気がした

あんなに穏やかな沖田が刀を抜いた瞬間鬼のようになったのだ

「ノボルさん。あなたにもいずれ習得してもらいますよ。我が天然理心流剣術を」

沖田はニコリとノボルに話かけた

宗則は後鳥羽上皇となにやら話あっている

「ノボルさん。どうやらこの時代にはいないようです。再びタイムスリップします。そろそろ行きましょう」

外からはウグイスが美しい音色で精一杯鳴いている

沖田たちが屋敷を出ようとしたとき
後鳥羽上皇が呼びかけた。

「待たれよ。沖田殿。こちらへ来るがよい。そちに渡したいものがある。」

宗則が刀を持ってやってきた

「これは菊一文字則宗。後鳥羽上皇様によく似合う菊の紋章と我が名前。則宗から取った名を付けた刀だ。受け取られよ」

吸い寄せられるような見事な刀だった

「ありがたくいただきます。大事に使わせていただきます。先を急がねばならないので私たちはこれにて失礼いたします。」

宗則と後鳥羽上皇は暖かく見送った

「沖田さん。言わなくていいのか？あの後鳥羽上皇って人、乱が起きて戦にまけるぞ」

「私たちがここにいてこと自体あつてはいけなはずなのです。これ以上、歴史を変えるわけにはいきません。」

乱とは 世にいう承久の乱である。

鎌倉幕府と朝廷の戦だ。

この戦で朝廷側は負け、後鳥羽上皇は流刑になる

しかし二人は伝えることができなかった
今、二人は日本の歴史を歩いている。

人は定められた死を必ず迎える

一刻も早く目的の悪霊を探さねばならない

手がかりはあの黒忍び装束が残した言葉

「九郎…処理」

二人は初めにたどり着いた山の中に着いた

突如、再び時空間が出てきた

「ノボルさん。行きますよ。怖くありませんか?」

「沖田さん」

「なんです?」

「あんたに菊は似合わないな」

ノボルは時空間に飛び込んだ

沖田は菊一文字則宗を見つめた

「私は桜のほうがお似合いですかね」

ニコリと笑って沖田も時空間に飛び込んだ

第6話 菊一文字則宗（後書き）

第6話ご愛読ありがとうございました。次作もよろしく願いします

第7話 五条大橋（前書き）

時間があるうちにたくさん更新します

お楽しみください

第7話 五条大橋

再び時空間の中に入った

体が浮いている。

…やはりこれは夢か？

出口らしき穴が見えた

「沖田さん」

「なんです？」

ノボルのお腹が鳴った

「腹へった」

2人は出口から飛び出した

…

？

ここは橋の上じゃないか

ノボルたちは赤い橋の上にいた

あたりは暗い

月の明かりだけがまぶしく輝いている

「どこだろう、ここは…ノボルさん大丈夫ですか？」

ノボルはお腹を押さえている

「…（腹へった）」

足音が聞こえた

誰かがくる

すごく大きな足音だ

1人の大男が現れた。

身の丈およそ二メートルはあるだろう。

…？ みたことある

大河ドラマや時代劇で見覚えがある格好だ…

「我が名は武蔵坊弁慶。命惜しくば、その腰の刀、置いてゆけ」

！？

さつきは鎌倉時代にいったのに

何故さらに過去に？

弁慶や義経が活躍した時代は平安時代末期だ

「この刀は大切な刀なんですよ。だから置いてはいけません。道をあけてくれませんか？」

総司は気づいているのだろうか

この男が弁慶だということを

「腕に自信があるのか？面白い。ぬし、名は？」

「沖田総司。怪我をしたくないなら道をあけてください」

総司の言葉に怒り狂ったように弁慶は長刀を振り回してきた

ヒラリ、ひらり とかわす総司

当たらないことにさらに血が上ったのか、弁慶は二メートルを超える頭上から長刀を振りおろしてきた

総司は菊一文字則宗を抜刀し、長刀を地面に払い落とした

同時に菊一文字則宗が、弁慶の喉元ギリギリに突きつけられていた

「…道を、あけてくれませんか？」

「ちくしょう…」

大きな図体の男から小さな声がもれた

菊一文字則宗…なんという鮮やかな刃なのだろう

総司は納刀すると歩き始めた

「行きますよ。ノボルさん。」

ノボルは目の前の現実が信じられなくなってきた

「沖田さん…これは夢だよな。」

するとまた足音が聞こえてきた

静かな足音だ

橋の下を流れる川のように静かな足音だ
桃色のはごろもが見えてきた

全身 桃色の着物をまとっている

容姿からすると女…か？

しかし刀を腰に差している

青年は歩きながら

笛のようなものを両手でにぎり口にあてた

綺麗な音色があたりに響き渡った

その音に反応するかのように座り込んでいた弁慶が起き上がった

そしてその場に仁王立ちになった

はごろもの合間から青年の姿が見えた

美しい

女のような美しい顔立ちだ

橋の真ん中に

弁慶と青年が向き合った

第7話 五条大橋（後書き）

第7話ご愛読ありがとうございました。次作もお楽しみに

第8話 鞍馬寺（前書き）

雨の日はなんとなく嫌だな

でも恵みの雨ともいうしね

天気ひとつで気分も全然違ってくる

さあ、第8話です

お楽しみください

第8話 鞍馬寺

「我が名は武蔵坊弁慶。千本の刀を集めている。ぬしのその刀が千本目だ」

先ほど総司に完敗したことなどなかったかのように強気だ

「命が惜しくば刀を置いてゆけ。」

「ことわる」

静かに青年は答えた

いきなり弁慶は長刀を一直線に振り切った

青年はふわりとそれをかわして弁慶の頭上を舞った

ムキになった弁慶はさらに連続して長刀を振り回す

しかし青年には当たらない

美しい舞だ

ノボルと総司はじっと見ていた

突進してくる猛牛をひらりひらりと舞かわす美しき蝶

弁慶の息が乱れ始めた

すかさず青年が縦笛を弁慶の喉元に突きつけた

またやられた…

弁慶は悔しい顔をしてその場に座りこんだ

まさかこんな若僧にやられるとは…

「我が名は牛若丸」

そう言い残すと青年は歩きだした

総司たちのほうへくる

「お見事です。私は沖田総司。こちらは弟子の網野ノボルです。あ

なたにお供させてもらえませんか。」

「そなたたち変わった格好をしておるな。何処よりまいったのだ？」

…！？

ちよつと待て

いつからあんたの弟子になった！？

ノボルは我が耳を疑った

「あの…腹ペコなんです。なにか食べさせてください」

ノボルが珍しく口を開いた

総司はクスクスと笑った

「私はこの先の鞍馬寺まで行く。山の中故にまだまだ遠い。ついてまいれ」

山の奥深くに鞍馬寺はあった

薄暗い夜道を登っていった

「お正さん。ただいま帰りました。この者たちは迷い人です。なにが食べさせてあげてください」

お正さんは変わった格好の二人を珍しそうに見ていたが、しばらくすると、ご飯を持ってきてくれた

「牛若丸さん。お正さん。最近変わったことはありませんか？」

総司は隣で勢いよく食べているノボルをよそに本題に入った

「特に我々の周りではないぞよ。牛若、なにか気づいたことはあるか？」

牛若丸も気づいたことはないと言う

一体どうやって悪霊を探せばよいのか

総司はノボルをみた

「お正さん、牛若丸さん。私たちもこの鞍馬寺にしばらく滞在させ

てもらえませんか？ 弟子のノボルに修行をさせたいのです」

ノボルは夢中で食べていたが総司の言葉に吹き出した

お正さんは快く引き受けてくれた

その夜、総司たちは部屋でゆっくりと眠った

翌朝、牛若丸はすでに修行のため外に出ていた

眠そうにノボルが目をあける

「ノボルさん。今日から我が天然理心流剣術を伝授します。外に出なさい」

山の中の朝は、とても清々しかった

第8話 鞍馬寺（後書き）

第8話ご愛読ありがとうございます
次作もお楽しみに！

第9話 天然理心流（前書き）

どの時代も働かなければ金は入ってこない

やりたくもない仕事を我慢してやるのは地獄だ

しかしそれが自分の目標のためならば、頑張ることはできる

目標というのは大事だ

では 第9話、お楽しみください

第9話 天然理心流

鞍馬寺を囲んでいる木々は美しい

静かに吹いてくる風を抵抗もなく受け入れ、木々の間からは木漏れ日が差ししている。

「ノボルさん、あなたはこの先、否応なく戦いの中に巻き込まれていきます。生き残るために強くなってください」

ノボルは部活もしてないし運動もロクにしていない

「同化できるんだからあんたが戦えば済むはずだろ？」

総司はノボルの声が聞こえてないかのように木刀を差し出してきた

普通の木刀に比べてやけに太くて重い

「天然理心流ではこの木刀を使い鍛えます。以前にも言いましたが実際の戦向きの剣法ですから、試合に勝つための竹刀を使った稽古はしません。」

それにしても太くて重すぎる

「沖田さん。これ重いよ」

「あなたは本物の刀を持ったことがないからわからないでしょうが、真剣は竹刀や普通の木刀のように軽くはない。竹刀などでいくら稽古しても無意味です」

ノボルは黙って総司に言われるがままに稽古を受け続けた

かつて、幕末の動乱期、京の町で奮闘した新撰組一番隊組長の天才剣士が何故に現代の弱りきった普通の高校生を鍛えあげようとするのだろうか。

疑問を感じながらもノボルは修行に没頭していった

朝も昼も夜も、徹底的に修行に励んだ

普段、温厚な総司が鬼になってノボルに修行をさせていた

… 一体、どれほどの時が過ぎたのだろう

お正さんがお茶を持ってやってきた

「どうですか修行のほうは？ ノボルはどちらに？」

「修行はまもなく終わりです。 ノボルは今、汗を流しにいます」

ノボルは滝の下にいた。

体中が痛い

頭から冷たい水が体全体を癒やす

「私たちは明日の朝、出立いたします。急がねばなりませんので」

そう

すでに鞍馬寺を出て行った牛若丸を探し出さねばならない

お正によれば牛若丸は奥州平泉に向かったという

藤原秀衡のもとにいるらしい

どうも牛若丸が手がかりになるような気がしてならなかった

ノボルはその夜、泥のような眠りについた

ズタボロになった体には、しかしながら確かに天然理心流剣術が身につき始めていた。

「私の体がつうちに、あなたに全てを伝授します。」

総司は眠っているノボルを微笑みながら見つめていた

第9話 天然理心流（後書き）

第9話ご愛読ありがとうございました。次作も是非、お楽しみくだ
さい

第10話 源氏軍（前書き）

人には適職と天職がある。

天職は自分が本当にやりたい仕事

そして適職とは天職の仕事をするためにやらなければならない仕事のことだ

働くことで辛い思いもたくさんするが、すべては自分の目的のためである

第10話 お楽しみください

第10話 源氏軍

奥州平泉まできてようやく牛若丸に会うことができた。

「私は源九郎義経と名を改めた。今は平氏との戦の真つ最中だ。」

源氏の総大将は源頼朝。

頼朝は義経の兄である

「義経さん。その後、変わったことはありませんか？」

九郎：後鳥羽上皇の屋敷に忍び込んできた男がつぶやいた言葉

「兄の頼朝が突如として消えたのだ。今は代わりに私が源氏の総大将として指揮をとっている。そなたたち、兄に出会わなかったか？」

「いえ、会っていません。義経さん、私たちも源氏の加勢をします。」

体中が痛くてたまらなかったノボルは一瞬痛みを忘れて我が耳を疑った

「まことか。それは助かる。我が軍は明日の明朝、平氏の本陣を奇襲する。そなたたちも同行するがよい」

マジか？

学校の教科書で源平合戦の話は何回も読んだが、まさか自分が参加することになるうとは…

やはりこれは悪い夢だ

そう思いたかった

翌朝、まだ日も昇らぬ暗闇の中、義経率いる源氏軍は平氏の本陣へ

と向かった

今、平氏は背後に海を回して陣を張っている

崖の上からいつきに襲えばひとたまりもないだろう

ノボルはボロボロになった制服の上から鎧を着ていた

物凄く重くて暑苦しい。

総司は相変わらず新選組の羽織りを着たままだ

「ノボルさん。この刀を。加州清光といいます。使いなさい」

ずっしりと重さが伝わってくる

しかし修行中に使っていた木刀とさほど変わらない

今から戦なんて実感がない

「見えるか？あれが平氏の本陣だ。狙うは総大将、平宗盛の首！」

平氏の本陣が見えた

彼らはこちらに気づいてない

今から戦が始まるのだ

「方々…

…
参る！！！！」

義経の一声で源氏軍がいつきに崖を駆け下りて平氏本陣へ突っ込んでいった

ノボルも総司も馬にまたがり、一緒になって突っ込んでいった

「…（やけに恐い夢だな）」

第10話 源氏軍（後書き）

第10話ご愛読ありがとうございました。次作もお楽しみください

第11話 奇襲（前書き）

自分の身は自分で守る

物騒な世の中、自分の身は自分で守らねばならない

危なそうな人間には関わらないことだ

強くならねばならない

さあ

第11話です。

お楽しみください

第11話 奇襲

源氏軍に奇襲された平氏は大混乱

ノボルはふと気がついた

「…（弁慶がいない）」

武蔵坊弁慶といえば義経が最も信頼する家臣だ

しかしこつちに来てから弁慶の姿は一切見えない

総司は？

どこだ？

…

いた

馬から降りて戦っている

バッサバッサと見とれるほどあざやかに敵を斬り伏せている

相変わらず刀を持つと鬼のように恐ろしくなる男だ

「…（隠れとくか）」

ノボルは岩山の影に身を潜めた

「…（人なんか斬れるかよ）」

義経は？

馬の上から敵兵を斬っている

こちらまあざやかだ

強い

本当に同じ人間か？

「…（お前らみんな殺人罪だぞ。）」

と、

身を潜めていたノボルに物凄い形相で1人の敵兵が斬りかかってきた

とっさに刀を抜き相手の太刀を受け止めた

同時に流れるように刀を滑らせ、銅を斬り払った

死ぬような地獄の修行で何度も何度も繰り返した訓練の成果が
でた

とはいえ…斬ってしまった

初めて人を斬った

こうなったらもう迷うことはない

加勢に入ろう

ノボルは気合いを入れて戦闘の渦の中突っ込んでいった

戦闘から1時間が経った

平氏軍は船に乗り込み、海へでた

「ここは我らの勝利だ！皆の者、ご苦勞であつた！ここに一度陣を張り、今後の作戦を説明する。しばしの間、体を休めよ」

総司は息ひとつ乱していない

ノボルは…

初めての命がけの戦闘に疲れ果てていた

前後左右から自分の命を奪おうと敵が襲いかかってくるのだ

高校生のノボルにとっては心臓に悪い経験である

「大丈夫ですか？ノボルさん。見事でしたよ。」

総司がニコリと話かける

義経が近づいてきた

「沖田殿、ノボル殿、ご苦勞であつたな。あとは取り逃がした平氏の総大将、平宗盛を討ち取るのみだ」

海に逃げた平氏軍の中に義経の兄が居ることを、このとき誰も気づいていなかった

第11話 奇襲（後書き）

第11話ご愛読ありがとうございました

次作もお楽しみください

第12話 壇ノ浦の戦い（前書き）

今日も1日精一杯頑張ったー！！

1日1日を大事にしなければ…

今日という日は二度と返ってこない

さて、

第12話、どうぞ

第12話 壇ノ浦の戦い

関門海峡…ここは潮の流れが急激に変わる

義経は、この潮の流れを利用して平氏軍を一気に叩くと言う

確かに歴史の授業で習った

「沖田さん。弁慶がいないのはなぜだ？」

ノボルが小声でたずねる

「私たちが弁慶の代わりになってるんじゃないかな。歴史の中に無理やり入っていつてるようなものです」

ノボルは違和感を覚えていた

なにかがおかしい

先ほどの平氏軍

やけにわざとらしく撤退したように見える

義経は自信満々だ

次の戦闘で平氏軍は壊滅すると考えている

舟に次々と源氏の兵士たちは乗り込んでいる

因縁の平氏を壊滅させることができるのだから、皆気合いが入っている

「ノボルさん、行きますよ。平氏軍をよく気をつけて見てください。変わった人間がいたら要注意です。」

とはいえノボルは歩くのも辛かった

初めての戦闘で体力気力を使い果たしていた

しかし舟に乗り込んだ

体に鉛をつけているようだ

潮の流れに乗って源氏軍は一気に進軍する

平氏軍の舟が見えてきた

「皆のもの、ぬかりなく！… かかれー！！！！！！！！」

義経の一声で皆が気合いを入れた

…？

平氏軍の舟に誰もいない

一体どういうことだ？

「…これは罠だ。義経さん！背後です！あの舟は罠です！」

総司は叫んだ

背後から平氏軍が近づいてきた

そんなまさか…

源氏軍は大慌てである

平氏軍の先頭の舟にある人物がいた

「あ　兄上！　なぜ！？　どうして！？」

義経は青ざめている

平氏軍の先頭で指揮をとっているのは本来の平氏総大将、平宗盛ではない

なんと源氏の総大将であるはずの頼朝だった

平氏軍は一気に攻めてきた

「皆のもの、慌てるな！冷静に敵を討て！」

義経が混乱した源氏の兵士に必死に声をかける

「奴だ。ノボルさん、あの頼朝を生け捕りましょう。」

「そうしたいのは山々だが体が動かない。」

戦闘が始まった

義経は華麗に宙を舞い平氏軍の中に斬り込んでいった

総司も舟から舟へ飛び移り、斬り込んでいった

ノボルは、ぐったり座り込んだ

頼朝は刀を両手に持っている

凄まじい豪剣だ

総司は頼朝の背後に乗り移っている霊の気配を感じた

「（誰だあの霊は…あれが間違いなく目的の悪霊に違いない。待つ

ている。私が必ずお前を食い止める）」

源氏軍と平氏軍は激しくぶつかりあっていた

ぐったりしているノボルのもとへ総司が戻ってきた

「私が力を貸します。よく頑張りましたねノボルさん。しっかりと私の戦いを感じとって体に染み込ませるのですよ」

総司がノボルの体に入った

久しぶりの同化だ

姿は総司だが、ノボルは意識がハッキリとあった

やはり同化とは不思議な感覚だ

「さあ。いきますよ」

菊一文字則宗を握りしめ、総司は再び平氏軍の渦へ斬り込んでいった

第12話 壇ノ浦の戦い（後書き）

第12話ご愛読ありがとうございました

次作もお楽しみに！

第13話 二刀流（前書き）

どうも。私、沖田総司です。

今日からみなさんに新選組についての話をしていきます。

知らない方も少しは覚えてもらえたら嬉しいな。

新選組は幕府の護衛集団のようなものです。元は江戸のあぶれ者たちの寄せ集めでしたが、厳しい鉄の結束の下、京都の治安を守るために結成されました。

敵対するのは長州や薩摩など幕府に不満をもつ藩全て。

そんな中、新選組を大きく支えた2人の方たちがいます。その人たちについての話はまた今度。

では 本編へどうぞ

第13話 二刀流

総司は義経の兄の頼朝を目指してひたすら目の前の敵を斬った

同化しているノボルは、このあまりにもあざやかな流れるような総司の動きをすっかり感じていた

平氏は源氏に負けるなど考えていないらしく、より一層激しく突撃してくる

義経は頼朝に近づいていない

やはり実の兄を斬るなどできないのか

頼朝は両手に持った刀を振り回し、こちらに向かってくる

まるで総司のみを狙いに定めたかのように…

戦闘から1時間が経っただろうか

源氏軍と平氏軍は、いったん戦闘を止め、向かい合った

義経と頼朝が顔を合わせる

「兄上！ 一体どうされたのです！？あなたは源氏の総大将です！
お気は確かか！！」

義経の悲痛な呼びかけが周りの海全体に響き渡る

「この世に源氏も平氏もいらん。最強の男は1人で十分だ。」

頼朝の背後に感じる不気味な気配

恐ろしい剣気を感じる

苛立ちを隠せない義経のとなりに総司が立った

「でてこい。お前は存在してはならない。その者の体を返し、おとなしく霊界に戻りなさい」

はいわかりました。というはずがないのは承知の上だが、一応聞くのがこの場にふさわしい

「そなたは一体何者だ？」

もしも、今、目の前にいる頼朝の体に何者かが総司のように同化して乗りうつっているならば頼朝もろとも斬らねばならぬのだろうか

義経が刀を抜いた

今まで唯一の肉親の兄を信頼し、源氏を共に盛り立てようと約束したはずの頼朝が、敵対関係にある

怒りと悲しみが入り混じり、義経は涙があふれでた

「兄上…目をお覚ましく下さい。あなたと刀を交えたくはありません

ん
」

源氏側の兵士も、平氏側の兵士も、その場の雰囲気を感じたのか、
皆、刀や槍を納めた

誰も抜こうとはしない

「来るがよい。ぬしの刀で我を黙らせてみてはどうだ？」

両手に持った刀が義経に狙いを定めた

齒を食いしばり、悲しみを押し殺し、義経は刀を抜いた

「お覚悟！ 兄上！」

義経はいつもの華麗な舞で宙を飛んだ

重力が義経の体を引き寄せる

刀を振りかぶり、兄頼朝をめがけ一刀両断！

：

血しぶきが飛んだ

海に叩き落とされたのは義経だった

刀を振り降ろす直前に、頼朝の素早い突きが義経を貫いた

総司は震えが止まらない

あの突きは、まさしく天然理心流を極めた己の必殺、三段突きだ

目にも止まらぬ早さの

「突き」を瞬時に三度繰り出す天才剣士、総司ならではの必殺技だ

それを目の前の男はいとも簡単にやってのけた

もしも総司の目に狂いがなければ、今見た三段突きは 目にも映らぬ恐ろしい突きであった

「元、新選組一番隊組長沖田総司。来るがよい。次はお前の番だ」

やはりこの男は頼朝ではない

あきらかに誰かが乗り移っている

総司は刀を抜いた

海に叩き落とされた義経の安否が気になったが、今はこの男を倒さねばならない

総司は菊一文字則宗に何かを語りかけるように静かに抜刀した

二刀流の構え

三段突き

全てが謎のこの乗り移った霊が目的の悪霊…

なのか？

第14話 決着？（前書き）

やあ、みなさん。また読みに来てくれてありがとうございます。沖田です。

今回は新選組の鬼副長 土方歳三さんについてお話します。

土方さんは武州多摩郡の石田村に生まれました。

家は農民で武家の子ではありませんでした

石田散薬という骨傷打ち身に良く効くと言われる行商をしながら生活してたらしいんだけど、やっぱり武士になるのが夢だったんだな

清川八郎という人が結成した上様を守るための集団組織、浪士組に加わって京にのぼったんです

後に新選組を支えた副長の土方さんは鬼副長と呼ばれるんだけど長くなるから続きはまた今度

お待たせしました

本編です

ህዝብ

第14話 決着？

やや下段に剣先を置くこの体勢が天然理心流の構えだ

対する頼朝は両手に刀を持ったまま仁王立ちだ

頼朝が全速力で向かってきて右に持った刀を振り下ろしてきた

総司は半歩後ろへ下がり、太刀をはずす

同時に突きを神速のごとく放った

みぞおちを狙った一撃は見事に決まった

頼朝は後方へ吹き飛んだ

鋼鉄の鎧に穴があくほど強烈な一撃だった

にもかかわらず一滴たりとも血は流れていない

総司は右肩に激痛が走った。
出血している。

総司が突きを放ったと同時に頼朝は左手に持っていた刀を振り下ろしていたのだ

あの神速の突きに合わせて同時に一撃を放ったというのだろうか

頼朝はムクリと起き上がり何事もなかったかのように突進してくる

総司も向かって走り出した

互いに渾身の一撃を叩きつけあう

しかし相手は二刀流だ。
動きが読みにくい

右肩の激痛に耐えながら総司は必殺三段突きを放った

頼朝も先ほど義経に放った三段突きを放ってきた

2人は弾け合うように吹き飛んだ

頼朝は起き上がり刀を納めた

「久しぶりに本物の侍にあった。ここで殺すのはつまらん。」

やはり目的の悪霊に違いない

「お前は何者だ！名乗れ！」

総司は逃がしてたまるかと　一足飛びで斬りかかった

しかしあざやかな胴一直線の太刀は空を切り裂いたにすぎなかった

悔しそうに総司は菊一文字を納刀した

そしてノボルの体と分離する

グツタリとノボルは座り込んだ

まるで地球を何周も全速力で走ったかのように信じられない疲労がドツときた

「ノボルさん。義経さんを助けに行きましょう。彼を死なせてはならない。」

ちよつと待つてくれ

あんた息一つ乱さずよくそんな平然と…

「ここで休んでいてかまいませんよ。私がいつてきます。」

総司は源氏軍や平氏軍が乗り捨てた舟に乗り込み、海に出た

強烈な一撃を喰らって海に叩き落とされた義経が生きている可能性は少ない

しかし義経を死なせてはならない

すでに歴史は踏みにじられ始めているが義経は必ず助けたす

任務意識よりも仲間意識のようなものが総司を動かしていた

「…（？…肩に受けた傷がない。」

先ほど同化しているとき、受けた攻撃の痛みは確かに感じていた

しかし傷はない

全て総司にいつているのだろうか

少なくともあの肩に受けた傷は致命傷のはず

霊とはいえ大丈夫なのだろうか

息をするのも苦しみながらノボルは大の字になってその場で眠りに
ついた

ああ

この空も真つ青だ

時代が変わっても、見上げる空はちっとも変わっていない

第15話 仲間（前書き）

どうも！沖田です。

前回の新選組鬼副長の話、覚えていますか？

土方歳三さん。彼は新選組の隊の規律を守るために厳しい掟を掲げました

それが「法度^{はつと}」

新選組は江戸のあぶれ浪士の寄せ集め。いわば烏合の衆。ひとたび反乱を許せば隊はバラバラになる

そのため土方さんは厳しい掟を定めたんです。

一・士道にそむくべからず

二・勝手に隊を離れべからず

三・勝手に金策いたしからず

…など、士道にそむく真似をするなどといういくつかの掟を定めました

これを破ったものは「切腹」

土方さんは隊の中では恐れられていましたが、すべては新選組を守るため

私は土方さんは素晴らしい方だと思います。立派な武士です。最後は函館の五稜郭で散ってしまわれたけど彼は立派な武士です

…と

思い出話に花を咲かせすぎました

では本編へどうぞ

第15話 仲間

義経は海の中を漂っていた

海底とはこんなにも暗く光の届かないところなのか？…

ああ体が重い

鎧をつけているのだから当然か

「兄上…何故…」

ここは深海か？

私はどこまで沈んできたのだ

…

？

息ができる

苦しくない

何故だ？

そういえば傷口も痛まない

しかし…

海のこの冷たい心地よさだけは感じる

ひんやりと気持ちのよい冷たい水が義経の体を包んでいた。意識が遠のいていく…

「…経さん…よ…さん…義経さん！」

聞き覚えのある声だ。

目を開くと先ほどまで共に戦っていた仲間がいた

「沖田殿…」

再び意識が遠くなる

ノボルは熟睡した心地よさで思い切り背伸びをした

人間、眠ることほど快感なものはない

「沖田さん…よく見つけられたな。義経さん、大丈夫なのか？」

総司が担いできた義経がノボルの横に横たわっている

「ここはどこだ？」

見覚えのある景色…

「鞍馬寺ですよ。よく眠っていましたね。あれから3日は経ちましたよ」

鞍馬寺…あの地獄の修行をしたところじゃないか

一体なにがどうなってる？

源氏は？平氏は？頼朝？は？

義経はゆっくり起き上がって総司たちに頭を下げた

「このたびは助太刀まことに感謝いたす。おぬしたちのおかげで助かった。礼をいうぞ」

歴史の授業で義経は滅法に強い男だと印象を受けていた

そのとおり強い男だった

しかしあの謎の悪霊によりあきらかに歴史が狂った

久しぶりにノボルは怒りを感じた

「義経さん、傷は大丈夫なのか？沖田さんに手当てしてもらったんだろ？」

「…」

お称さんがやってきた

「牛若…客人じゃ。武蔵坊弁慶と名乗っておる。通すか？」

うなずく義経…しかし表情が暗い

総司も黙っている

「…（二人ともどうしたんだ？葬式のあのような顔して…）」

しばらくすると弁慶が現れた

あの五条大橋で出会った男だ
デカいな

「牛若丸…いや源九郎義経殿…ようやくお会いできました。率直に
お頼み申す！私を家来にしてくださいださるぬか！？お頼み申す！このと
おり！」

義経は黙っている

「下がれ…私は死人だ。死人を主人にする必要はない」

…???

第16話 窮地（前書き）

みなさんこんにちは。

沖田です

土方さんの話はわかってもらえたか？

今日からは新選組三番隊組長の斎藤一さんの話に移ります

彼は謎が多いんですよ

江戸にいたころは借金取りやヤクザの用心棒してたみたいです

しかし近藤先生に恩を借りて京で浪士組に参加したんですよ

無口だけど義理堅く真面目で仕事はきっちりこなす

そういう人でしたね

斎藤さんは時代が変わっても生き延びて警官隊になったそうです

私は斎藤さんを尊敬してます

私も斎藤さんたちと一緒に最後まで戦いたかった…

え？近藤先生って誰かって？

それはまた今度

それじゃ本編へどうぞ

第16話 窮地

「義経様…死人とはどういうことですか？」

義経はわかっていて

海の中で息ができていたこと、傷口が痛まないこと…これは…死んでしまったためである

しかし肉体がこうして存在するのは…総司と同じく任務を受けたからであろう

総司は弁慶にも詳しく事情を説明した

なにもかもすべてを話した

さすがに弁慶も驚きを隠せなかった

「義経様…私はあなたがたとえ死なれてしまわれていても思いは変わりませぬ。沖田殿たちに、あなた様に、ついて行きます」

下を向いていた義経も笑みを浮かべてうなずいた

「沖田殿…我々も協力いたす。兄上を乗っ取った悪霊を私は許さぬ。共に戦おうぞ。」

こうして4人になった総司たち一行は再び悪霊を探しにでかけた

まだこの時代にいるのか…いないのか…まずは頼朝を探してみることだ

お尚さんの話によると頼朝は新たな一軍を率いて奥州平泉にいますという

藤原秀衡一族を支配し、拠点にしているらしい

「義経さん…気をつけてください。私とあなたはすでに霊体です。霊体の状態で死ぬと、完全に無になります。これまで生きてた証さえすべて消えてなくなります。くれぐれも気をつけてください」

「承知した」

4人は奥州平泉を目指した

相手の軍勢がどれだけなのかわからない
こちらは4人…無謀な戦になるかもしれない

しかし頼朝を乗っ取っている悪霊を倒さないとその先どんどん歴史が壊れていく

「…（…美紀…）」

総司はふとノボルを見る

美紀…今まで全く口にしなかったが美紀とはノボルの幼なじみであり恋人だ

面倒見がよく明るくておちやめな可愛い女の子だ

今までノボルが道を外れなかったのは美紀のおかげだ

「ノボルさん、私との修行を思い出しなさい。そのまま発揮すれば負けることはありません。」

気休めに聞こえたが今は戦って勝つしかない

森が見えてきた

奇妙な城が建っている

「なんだあれは…？あんな城は奥州平泉にはなかった。沖田殿…あそこに攻め込むのか？」

「そうです。頼朝だけを狙ってください。4人のうちの誰かが1人でも悪霊を頼朝から誘い出し、仕留めることができれば、必ずあの悪霊は消える。いきますよ」

森の中ににどンドン入り込んでいく

静かだ

小鳥のさえずりさえ聞こえない。

百メートルほど先で大勢の雄叫びのような声が聞こえた

向かってくる軍勢の足音…

どうやら相手もこちらの動きを読んでいたらしい

数百の軍勢とノボルたち4人がぶつかった

ひたすらに斬って斬って斬りまくる総司…

前から後ろから流れるように隙を見せない動きだ

中でも突きは恐ろしく強烈だ

やはり三段突きは総司ならではの技だ

義経も向かってくる相手兵士を見事にさばいている

ノボルはとにかく必死に刀を振り回した

こんなところでは死ねない

しかし最悪なことに弓矢隊が矢を放ってきた

なんとか避けながら戦い続けるがさすがに息切れがしてきた

弁慶がノボルの前に立つた

「小僧、しっかりせえ！」

大きな長刀を振り回し一気に敵を退ける

斬っても斬ってもあふれ出てくる兵士たち

そのとき新たに軍勢の足音がしてきた

あれは源氏軍だ

解散したかと思っていた源氏軍が加勢にきたのだ

「義経様！背後の道を伝つていくと抜け道がございます！ここは我々に任せて先へお進みください！」

まさに窮地に陥っていた4人を救った奇跡だった

総司はまだ気づかずに斬りまくっている

鮮やかな太刀は乱れることなく走っている

刀と総司が一体になって動いている

「沖田殿！源氏軍が加勢にきてくれた！我々4人は兄上のもとへ向かう！」

4人は抜け道を通って城の裏門にきた

「皆、怪我はないか？これより兄上のもとへ向かう。もう一度話を
して、それでも無駄ならば…今度こそ容赦なく兄上を斬る！ 参
ぞ！」

弁慶は息切れもなく仁王立ちして元気そうだ

ノボルは息切れが激しいが傷は負ってない

刀も折れてない

「…（やべえ…マジきつい）」

総司も傷ひとつない

あれだけ動いたせいかさすがに少し息が乱れている

「みなさん先にいつていてもらえますか？私は源氏軍をもう少し手伝って後からから行きます。：義経さん、弁慶さん、ノボルを頼みます」

様子がおかしい

総司にしては多少息切れが激しく汗が凄い

「承知した。それでは沖田殿。後にまた会おうぞ」

弁慶の長刀一閃が固く閉ざされた裏門を破壊した

3人は先に進んでいった

「：？（沖田さん？）」

ノボルは不思議そうに総司を振り返った

総司はいつものようにニコリと笑ってこちらを見ている

源氏軍も総司が加わればかなり優勢になるだろう

3人が城に入ったのを見送り総司は再び源氏軍のもとへ向かおうと歩きだした

一歩足を踏み出したとき、咳がでた

なかなか止まらない嫌な咳だ

胸元あたりが急に熱くなり、咳をしながら吐血した

浅黄色に白のダンダラ模様の羽織りに鮮やかな血の色が飛び散った

そして刀を握ったまま口元を手で抑えながらその場に座り込んだ

第17話 不治の病（前書き）

お久しぶりでみなさん。沖田です。ちょっと姉上のもとへ遠出してましたのでお話が遅くなりました。

新撰組メンバーのお話は次の話から再開いたしましょう

久しぶりの history guy お楽しみください

第17話 不治の病

義経たちは最上階まできた

そこには頼朝がいた

「刀を抜くか？義経」

不適な笑みを浮かべながら頼朝が話かけてくる

斬りかければ頼朝の体が傷つくことになる

義経は刀を抜き、一呼吸おくと一気に飛びかった

高く高く舞い上がり頼朝めがけて一直線に刀を振り下ろす

頼朝は刀を抜かずに義経の太刀を受けとめた

同時に鞘から抜刀すると一回転して遠心力をつけたまま義経に強烈な一撃を加えた

しかし義経も刀で受け止めた

凄い衝撃が伝わってきて吹き飛びそうになった

が、そのまま身をかがめ 胴に一撃

刀でふさがれたが今度は頼朝が吹き飛んだ

頼朝は起き上がらない

と そのとき、頼朝の体から何者かが出てきた。一体誰なんだこいつは？

光っていて素顔が見えない。時空間が開いた。このままではまた逃げられてしまう。

「君たちが私をまた探し出せたら、次は本気で相手をしよう。なかなか面白かったぞ。」

そう言うとき光の男は時空間に飛び込み消え去った。

その様子を一部始終見ていたノボルはため息をついた。「また探すのかよ……」

「深追いは無用です。」

総司がやってきた。汗をかいている。そして羽織に真っ赤な鮮血が飛び散っている。

弁慶が不思議そうに話しかけてきた。

「沖田殿。返り血か？ 斬られてはいないようだが……汗がすごいな。大丈夫か？」

総司はニコリと笑いうなずく。

「返り血ですよ。外の戦闘もおさまりましたよ。少し休息をとって後を追いましょう。」

ノボルは刀を握り締め座り込んだ。四人は鞍馬寺に戻り休んだ。ノボルにとっては信じられない体験であつたろう。まさか戦に参加することになるうとは思ってもみなかったはずだ。

静かな夜が過ぎていく。

・
・
・

翌朝・・・

ノボルは総司と町をあるいていた。着物を探していたのだ。学校の制服はズタボロになってもう着れない。

紫の着物を買った。お金は和尚さんにもらってきた。

「・・・（かつこわりい）」

「そんなことはありませんよ。ノボルさん。お似合いです。あははは」

ノボルは気になっていることを総司に聞いた

「沖田さん・・・あんた・・・労該が治ってないんだろ？昨日のあ

の鮮血は返り血なんかじゃないよな？」

「・・・」

「

第18話 束の間の休息（前書き）

皆さん お久しぶりです。総司です。 永い眠りについていました。 ようやく目が覚めたので再び物語と一緒に見ていきましょう。

新選組隊士の話についてはまた次回から再開します

では、いざ本編へ…

第18話 束の間の休息

ノボルの言葉に総司は悲しげな笑みを浮かべた

「やはり気づかれてしまいましたか…　そうです。私はまだ病魔に取りつかれたままです。死んでもなお、病魔に取りつかれたままとは…悔しいですよ。」

労核とは現代医学という肺結核のことだ

現代では治せない病気ではない

しかし　総司が生きた時代の医学では治せない不治の病だったのだ

この病魔のために総司は畳の上で生涯を終えた

死んでもなおこの病魔がとりついてるのは歯がゆくて仕方ないだろう

「沖田さん…この戦いが終わったら、あんたに渡したいものがある」

「え？なんですか？」

黙ったままノボルは歩き出した

総司は着物を着てぎこちなく歩くノボルの後ろ姿を見ながら少し微笑み、大きく息を吸った

「今度こそ、私は最後まで戦うぞ。畳の上では死なない。私は死んでも武士だ」

夜… 義経と弁慶と総司は眠ったノボルを横目に話し合いを始めた

「総司殿… 兄上にとりついてたあの霊は、凄まじい腕前だ。歴史上見渡してみても心当たりな人物はいないのか？」

「… 二刀流… 三段突き… あのしゃべり方…」

総司も考えてはいたが頭に浮かんでくる人物はいない

「あんなやつはワシの長刀一閃で葬ってやりますわい。何が目的かは知らぬが根っからの悪党に違いない」

いきり立つ弁慶… 主人に迎えるべき義経を亡き者にし、暴れ回る霊を一刻も早く叩きのめしたくてたまらないのだろう

すでに歴史は変わっている

すぐに追いかねなければさらにめちゃくちゃにされるだろう

「二刀流って言やあ…宮本武蔵じゃないのか…」

眠っているはずのノボルが口を開いた

「起きてたんですか…ノボル…宮本武蔵…確か巖流島の決闘で名が知れたかの宮本武蔵ですか？…確かに…しかしだとしても何故…」

義経と弁慶は宮本武蔵という名を知らない

生きた時代が違うから当たり前だが…

「その宮本武蔵という者の霊が暴れ回っているのか？兄上の身体を利用し…くっ…」

そのとき 部屋の片隅にあの次元の穴が突如開いた

「皆さん、行きますよ！考えるのはまた着いてからにしましょう！」

総司のあとに続いて三人も飛び込んだ

果たしてたどり着く先は…？…

第19話 毘沙門天（前書き）

皆さんご無沙汰してます。沖田総司です。また一緒に物語を見ていきましよう。

第19話 毘沙門天

たどり着いた先は

寺の境内だった

義経が懐かしそうに寺全体を見渡している

「私も鞍馬寺で修行に励んだものだ。あの修行がなければ、私は刀と一体になることはできなかった」

ここも、鞍馬寺のように修行をするための寺なのだろうか…

ノボルが何かを見つけて立ち尽くしていた

総司は不思議そうにノボルに歩みよった

「これは何の像なんです？ノボル知ってますか？」

「
…」

義経と弁慶も歩みよってきた

4人の背後から声が聞こえてきた

「そちらは毘沙門天様だ」

振り返ると白い頭巾のような布をかぶった男が立っていた

見たことがある。

ノボルはよく学校で日本史の授業で教科書を開き目にしていた人物だ。

「我は上杉謙信と申す。そちたちは、何者だ？何故にここに居るのだ？」

上杉謙信…ということはここは戦国時代か！

「私たちは探し人を求めてここに迷い込んでしまいました。しばらくの間、こちらに居てよいですか？」

総司が人なつつこい口調で謙信に話しかける

謙信は疑うこともなく4人を部屋にとおした。

「毘沙門天様は戦の神だ。私は明日、春日山城へ帰るが、そなたたちはいかがする？」

とりあえず謙信に着いていき、手かがりが現れるのを待つしかない。

「我らも謙信公にお共させていただきたい。」

義経が口を開いた。

しばらくの間を置いて謙信が口を開く

「そなたたち、刀を備えておるな。腕前を見せていただけるか？
私がお相手を致す。」

謙信が戦の神と言われるほどの力を持っていることを知っているのはノボルだけだ。

義経と弁慶は、時代が明らかに違っていて知るはずがないし

総司は、知っていてもおかしくはないが、勉強をしていなかったため知識に関してあまりなかった

「4人一度に参られよ」

義経たちは驚いて、一人ずつと申し出たが謙信は、あくまでも

「4人一度に参られよ」

と返事をする。

「仕方がありませんね。皆さん、いきますよ！」

総司のかけ声で

義経、弁慶、ノボルはいつせいに謙信に飛びかかった。

第19話 毘沙門天（後書き）

次回もお楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0645e/>

history-GUY

2010年11月14日03時18分発行